

2011 年度
日本大学
国際関係学部卒業論文

サイパン戦・沖縄戦を経た日本人捕虜のアメリカ観

国際交流学科
中沢 彩乃

指導教員：小代有希子先生

『サイパン戦・沖縄戦を経た日本人捕虜のアメリカ観』

目次

はじめに

第1章 サイパン戦

- I. サイパン戦におけるアメリカへの恐怖
- II. 日本人捕虜の証言
 - (1) 反米派
 - (2) 親米派

第2章 沖縄戦

- I. 沖縄戦におけるアメリカへの恐怖
- II. 日本人捕虜の証言
 - (1) 反米派
 - (2) 親米派

第3章 アメリカ側の動向とその思惑

- I. サイパン戦の場合
- II. 沖縄戦の場合

第4章 真実の声を探して

- I. サイパン戦における日本人捕虜のアメリカ人観の真相
- II. 沖縄戦における日本人捕虜のアメリカ人観の真相

終わりに

使用文献表一覧

はじめに

今から約 70 年前、太平洋戦争当時の日本軍は、帝国戦争目的達成上絶対確保を要する圏域、つまり「絶対国防圏」のうち、防衛線の最北端に位置するサイパンに対して、日本列島を目指して北上してくる連合国を食い止める役割を与えていた。¹ このためサイパンには、日本本土への攻撃が本格化することを回避するために、太平洋の最後の要塞である必要があった。しかし、いわゆる「バンザイアタック」という日本軍の肉弾攻撃や、「バンザイクリフ」（これは戦後つけられた名称だが）などからの民間人の集団自決などの犠牲を経て、サイパンは 1944 年 7 月 18 日、ついに米軍に陥落する。

この後、サイパンと同じような運命を辿ることとなった島がある。それが、沖縄である。大本營の方針などにもはっきりと示されているように、沖縄戦に際しても日本軍は、出来るだけ長く多くの米軍を沖縄に引きつけ、敵に多くの損害を与えることで本土決戦を有利にしようとした。政府は沖縄戦においても、多数の住民の犠牲を伴う「共生共死」の作戦を展開したのである。² 日本軍のために、壕掘り砲弾運びをさせられたいわゆる非戦闘員のうち、55,246 人、それ以外の一般住民 38,754 人が死亡、軍人軍属も含めて合計 122,727 人が死亡した。この数は当時の沖縄諸島の人口（県外疎開者を除く）の 1/4 弱にのぼる。³

サイパンと沖縄の一般市民はどちらも、対米日本本土防衛のための捨て駒として犠牲を払うこととなったのである。特にサイパン戦も沖縄戦も米軍が島に上陸して地上戦を戦ったため、米軍と日本軍の間には、避難出来ない「民間人」がいたことが、その被害の大きさに拍車をかけた点も共通している。また、1920 年代以降、サイパンを含む南洋群島に在住する日本人の約 2/3 を沖縄

¹ 野村進『日本領サイパン島の一万日』（岩波書店 2005 年）、p.210。

² 吉田健正『沖縄戦 米兵は何を見たか－50 年後の証言』（彩流社 1996 年）、p.34。

³ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たか－50 年後の証言』 p.35。

出身者が占めていたという歴史的事実もあり⁴、サイパンと沖縄とは切り離すことが出来ない関係にあるといえよう。

戦争を知らない世代である私たちからすれば、サイパンと沖縄の繋がりといえば、どちらも南国のリゾート地であるということくらいしか浮かばないかもしれない。しかしながら、サイパンと沖縄には歴史的に見ても、こうした深い繋がりと多くの共通点がある。サイパン島の陥落により、サイパンとその隣のテニアン島は米軍の基地となり、そこを基点として米軍は沖縄戦に向かったという経緯からしても、サイパン戦と沖縄戦は個々のものではなく、一連の流れとして捉えるのが妥当だと考える。

そして、サイパンと沖縄には、もう 1 つある共通点がある。それは、実は日本人捕虜が多く存在していたことである。「生きて虜囚の辱めを受けず」という戦陣訓が日本兵だけでなく、民間人の中にも浸透していたことで、当時、多くの日本人は鬼畜な米軍の捕虜となれば、死よりも恐ろしい非人道的な扱いを受けると考えていた。日本人にとって、アメリカとはそれほどの恐怖の対象として位置づけられていたのだ。

ところが、日本人の一般住民たちはいざ米軍の捕虜になると、反米的態度から一変して、米軍に対して好意的な意見を持つ「親米」派のようになったことがさまざまな記録から分かる。私はこの事実に驚き、それと同時にそうした親米派の日本人捕虜の証言にかすかな違和感を覚えた。そこで、今回の卒業論文では、サイパン戦と沖縄戦の後、米軍の捕虜になった人々の、勝者アメリカと敗者日本に対する姿勢の変化を比較検証することにした。そして、1945 年 8 月の決定的な日本の敗北を前に、米軍の捕虜になった日本人が、アメリカに対して本当のところ一体何を感じていたのか、その真意を探ることにする。

第 1 章 サイパン戦

⁴ 松田カメ [述]、平松幸三編『沖縄の反戦ばあちゃんー松田カメ口述生活史ー』（刀水書房 2001 年）、p. v。

I. サイパン戦におけるアメリカへの恐怖

サイパン島は、米軍にとって爆撃機が燃料補給なく日本本土の主要都市を攻撃できる距離にあった。このため、米軍は、サイパン島を格好の本土爆撃の航空基地として位置づけていた。1944（昭和 19）年 2 月 23 日に、サイパン島は、米軍による初の空襲を受け、同じく 1944（昭和 19）年 6 月 15 日には、ついに、サイパン島西部海岸から米軍が上陸を開始。戦闘は激化する一方だった。そして、この後の 6 月 24 日、日本の大本営は、サイパン島放棄を決定。7 月 7 日、中部太平洋方面艦隊司令長官南雲忠一中将をはじめとする 3 名が残存する兵士に「太平洋の防波堤」として最後まで徹底抗戦するように命じて自殺。残された日本兵らは、ゲリラ戦へと突入していった。

こうした戦闘の中、民間人の間では米軍に捕まると男は八つ裂きに、女は強姦されて殺されるとの噂が広まった。これは、中国大陸から転進してきた日本軍が自ら大陸で行なってきたことを米軍も行なうであろうと広めた流言であったが、行き場を失った民間人たちは、身内同士や仲間同士での殺し合い、あるいは自害を余儀なくされていった。⁵

サイパン島がこうした戦場と化す前には、邦人のうち婦女子と 60 歳以上の老人を内地へと送還するという動きもあった。1944 年 3 月下旬、帰国第一戦のアメリカ丸がサイパンから出港を開始した。しかし、硫黄島沖で米潜水艦に襲われ、ほぼ全員が行方不明。さらに、6 月上旬には、千代田丸、白山丸が魚雷を受けて沈没し、サイパンの在留邦人は、帰るすべを失うこととなった。⁶ こうして、サイパンに暮らす人々は、日本本土から見放され、自ら帰ることも出来なくなった。しかし、だからといっておめおめと米軍の捕虜になるわけに

⁵ 『沖縄県史 資料編 18 キャンプススッペ（和訳編）現代 3 サイパンにおける軍政府の作戦の写真記録』（沖縄県教育委員会 2004 年）、pp. 〈4〉－〈5〉。

⁶ 下田四郎『サイパンの戦車戦 戦車第九連隊の玉砕』（光人社 2002 年）、p.77。

もいかない。ゆえに、サイパンにいる人々には、もはや玉砕の道を選ぶことしか方法がなかったのかもしれない。

サイパン戦の最中、日本人がアメリカに抱いていた恐怖の度合いは、彼らがアメリカ人から逃れるために集団自決を図ることがあったという事実からも伺い知ることが出来る。以下ではそのような理由で自決を試みたが、最終的には米軍の捕虜になることとなった何人かの日本人の例を挙げてみたい。

ある朝、南洋興発の甘蔗（サトウキビ）の蔗作人だった鈴木与作とその一家が避難している洞窟には、ジャングルをかき分けて何者かが向かって来ていた。何か叫んでいるようだが、どうやら、日本語でなく英語のようだ。暑くて狭い洞窟の中で、当時 13 歳の鈴木洋邦（与作の長男）は背筋が寒くなり、震えてきた。ひきつった顔を父親に向けると、父親と義兄（斉藤繁光）が目配せをしている。「アメリカ兵だ！」と父がつぶやき、義兄の手に出刃包丁がキラリと光った。サトウキビ作りしか知らない実直そのものの与作一家もやはり全ての島民と同様に戦陣訓の教え通りの死を選んだのだった。洋邦、与作、やす・・・皆、死が怖いとは思わなかった。むしろ米兵に捕まることのほうが恐かった。

義兄の斉藤は、初めに 2 歳になる我が子に手をかけた。「ギャー」という悲鳴が狭い洞窟に響くと、今度は 1 年 8 ヶ月になる洋邦の弟・守男、4 歳の一二三と次々に血だらけの出刃包丁が振るわれて、あっという間に洋邦の番になった。義兄の振り下ろす出刃包丁が洋邦の首筋に触れた瞬間、洞窟に飛び込んできた 1 人の米兵のタックルにより、義兄はのけぞり、洞窟の天井も壁面も真っ赤に染めて、自らの喉を付いて果てた。間もなくして、生き残った姉・ヨシ子と妹・輝美、洋邦の 3 人が米兵に救出されたのだった。⁷

当時、南興水産(株)自動車修理工場に勤めていた 18 歳の杉山蔵男さんは、逃走生活の中で、母が死に、父も重傷を負って動けなくなったため、幼い弟（9 歳）と妹（5 歳）と逃走を続けていた。両親と別れて数日後、偶然出会った軍

⁷ 平櫛孝『肉弾！！サイパン・テニアン戦－玉砕戦から生還した参謀の証言 大東亜戦争秘録』（図書出版共栄書房 1979 年）、pp.270－272。

人の大塚さんという人たちと行動を共にすることにした。それからまた数日後、その日は疲れていたもので、ポンタムチョウの見える崖にあった人口の壕の中で、杉山さんらは体を横にして、そのまま寝入ってしまった。どのくらい寝てしまったのか、頭の上が騒がしいので目を開けてみると、杉山さんの目の前には数人の米兵がいた。銃を持って怒鳴っていたため、彼は飛び起き、壕の奥へと逃げ込もうとしたが、「蔵ちゃん、逃げるな」と大塚さんに言われたので、皆と同じように手を挙げた。「怖い」と思ったが、大塚さんが「水を沢山飲んで、明るいところで一緒に死のう」と言ったため、腹をくくった。それから、銃を突きつけられたまま、全員トラックに乗せられた。「どうせ死ぬんだ。飛行場に行ってローラーでひき殺すために連れて行かれるんだよね。でも、最期にきれいな水を飲んで死のうと覚悟していたからいいね。」といった話をしていたという。⁸

上のような証言からは、米軍に発見されると何のためらいもなく、そして年齢を問わずして、自ら死ぬことを選択しているということがよく分かる。さらに、自殺するために、愛する家族を手にかけることまでしているのだ。つまり、追い込まれたサイパンの人々が家族や仲間同士で殺し合っても「米軍の捕虜になる」ことを嫌がったのだ。米軍は死よりも恐ろしいと、サイパンの人々に認識されていたということが伺えるのである。

Ⅱ. 日本人捕虜の証言

サイパン戦で米軍に捕まった日本人は、軍人と民間人に分けられた。軍人はまとめてハワイへと船で送られていったが、民間人は、サイパンに残り、敵国人である日本人は、敵国人以外の朝鮮人、チャモロ人およびカロリニア人とは分けられて収容所に入れられた。⁹ そうした日本人捕虜たちは、まもなく

⁸ 杉山蔵男『サイパン帰還者の手記』（2000年）、pp.27-28。

⁹ 白井文吾『烈日サイパン島』（東京新聞出版局 1979年）、pp.273-274。

反米派と親米派に分かれるようになった。1945年9月25日、民間人捕虜を収容していたススッペ・キャンプ内では、日本の敗戦を断固として信じない、狂信的ないわゆる「勝ち組」の収容者が、日本の敗戦を主張する「負け組」の収容者を襲い、労務係をしていた男が1人犠牲となる事件が起こっている。¹⁰

こうした事実をふまえて、明確な発言等がなくとも、日本の勝利を信じて疑わない者とは少なからず米軍を憎み続ける気持ちがあると考え、以下の考察では反米派とする。同じく、収容所内での米兵との接触において、米兵の行為を好意的に受け止めている者を、親米派と定義づけて、彼らの話しを検証していくこととする。

補足として、収容所では当時の日本人が想像していたような、「米軍に捕まると、男は八つ裂きに、女性は強姦されて殺される」などということは全くなく、米軍の日本人捕虜への処遇は国際法の中の国際捕虜法に基づいて行われたということは予め付け加えておきたい。¹¹

(1) 反米派

1945年8月15日、すでにアメリカの占領下にあったサイパン島は、いつもと様子が違っていた。海には万国旗を満艦飾に飾り立てたアメリカの軍艦数10隻が姿を現し、一斉に空砲が撃ち出され、汽笛も力強く鳴らされた。艦隊の周りには、同じく小船もいた。すると今度は陸の方でも祝砲が上がり、サイレンを大音量で響かせた。ススッペ・キャンプにいた米兵らは、仕事を放り出して歓声を上げ、「ジャパン・ノー・モア、ジャパン・ノー・モア」と誰彼ともなく抱き合っていたため、収容所内で石山正太郎さんは「馬鹿野郎、日本がなくなるはずがあるか」と腹を立てつつも、普段通りに作業現場へと向かった。

¹⁰ 前述『日本領サイパン島の一萬日』pp.1-2。

¹¹ 前述『沖縄県史 資料編18 キャンプススッペ（和訳編）現代3 サイパンにおける軍政府の作戦の写真記録』pp.〈5〉～〈6〉。

ところが、いつもに増して上機嫌な監督役の米兵から、「仕事はもういいから、キャンプへ帰れ」と言われたため、引き揚げると、人だかりが出来ていたという。「ことによったら、休戦だぞ」「アメリカは命が惜しい人種だから、何とかして戦争をやめてもらいたいのさ」「日本が損さえしなければ、やめてやってもよかろう、なあ」などと、日本人収容者は皆好き勝手なことを言っていた。軍人捕虜と違って日本の戦況を知る術のなかった民間人捕虜は、東京大空襲も、それに続いて名古屋・大阪・神戸へと焼夷弾爆撃があったことも、もちろん米軍の沖縄上陸も知らなかった。そのため、ましてや終戦を迎えたことなど夢にも思わず、彼らは誰も日本の敗戦おろか日本が不利な状況にあるのではないかとの疑問すら、口には出さなかったのだ。

また、この翌日ススツペ収容所内では、米軍のサイパン放送局から、天皇の「玉音放送」が流された。だが、雑音が多い上に言葉がはっきりせず、よく聴き取れなかったため、今度は民政部から「終戦になったことを知らせるために、今晚映画をやるから見てくれ」と告示があり、米戦艦ミズーリ号艦上での降伏文書調印式のニュース映画が、広場の野外ステージで上映された。しかしながら、「そんなもの見せられたら、アメリカに惑わされるだけだ。日本が負けたなんて、そんな馬鹿な話はない。きっと、アメリカは役者を使って、嘘の映画を造ったに違いない」と、見に行かない者の方が多かったのだ。¹²

こうした日本軍の勝利を信じる人々、いわゆる勝ち組は、収容所の中でひそかに戦犯を決める作業も進めていたともいう。日本軍がサイパンを奪回したあかつきには、米軍への協力者を裁判に付して処罰するためのリストアップをしていたのだ。

一方、捕虜の中でも南洋興発事務課に勤務していた末松乙柳さんは英語が少し出来たため、収容所では米軍の事務所で働くようになり、そこで日本軍の苦戦の事実を知るようになった。彼は日本の敗北を認める負け組だったが、米軍

¹² 前述『沖縄県史 資料編 18 キャンプススツペ（和訳編）現代3 サイパンにおける軍政府の作戦の写真記録』pp.348-350。

に協力したとあって、日本の勝利を信ずる若者から攻撃されることがないように、日本の敗戦という見通しを人には決して漏らさないようにしていた。だが、勝ち組からはひそかに戦犯 13 号となすけられ、狙われてしまっていたことを彼は少しも知らなかった。¹³

反米派の日本の勝利を信ずる精神は、引き揚げの際にも尾を引いていた。サイパンからの引き揚げは、終戦翌年の 1946 年 1 月 8 日下田へ向けた便で始まる。しかし、南洋から帰還した人たちの多くが日本の敗戦を半分信じておらず、例えば、沖縄の港に着き星条旗を掲げたボートが接近してきて初めてがっかりしたのだという。¹⁴

(2) 親米派

1944 年年 7 月 7 日頃、ガラパン町のタッポーチョの農家だった渡辺家の人々は、マッピ岬からの投身自殺を図るも、幸か不幸か、彼らは助かり、夜が明けてからトラックで収容所へと送られた。そして、収容所に到着直後は与えられた雑炊を毒入りだと疑うが、先に入所した民間人の話を信じてそれらを食べたところ、アメリカに対する態度は一変した。彼らは「アメリカ兵は日本人より親切だということがわかった。いたずらもしなかった」と当時を振り返る。¹⁵

ススペ・キャンプに収容されていた斎藤貞三さんは、「あれだけの皆殺しをやったアメリカを礼讃するわけじゃないですが」と断りながらも、「もし日本とアメリカの立場が逆転していたとしたら、日本はアメリカの捕虜をあんなに親切に扱わなかったと思いますよ。きっと、こき使ってひどい目に遭わせたり、と。なんととっても、アメリカは女・子供を襲いにくる同僚の【クロ】を逮捕して、見世物にしたくらいなんですから」と言う。この話は、こういうこ

¹³ 前述『烈日サイパン島』 p.275。

¹⁴ 前述『沖縄の反戦ばあちゃんー松田カメ口述生活史ー』 p.130。

¹⁵ 前述『烈日サイパン島』 pp.230-233。

とである。夜、黒人米兵がキャンプに忍び込んで共同便所などに潜み、用を足しに来た日本人婦女子にいたずらをする事件が続いて起こったそうだ。いずれも未遂ではあったが、米軍側は徹底的な捜査の末犯人を捕まえて収容所内を引き回し、日本人らに謝罪したというのである。これを、斎藤さんは「アメリカの公平さの現れ」だと評価していた。¹⁶

日本兵の中にも親米的に態度を一変させた者が存在していた。例えば、第四十三師団の平櫛孝参謀は、総攻撃の最中、目の前で火の固まりが炸裂し、爆風と火気で吹き飛び、付近の溝にたたきつけられた。どうやら、米砲兵の近距離射撃を受けたらしく、自分で応急止血をしたまでは覚えているが、眠くて眠くて仕方なく、そのまま気絶してしまった。その後、意識を回復したのは、アメリカ軍艦の医務室のベットの上だった。実は、彼はマタンシャの海岸近くで出血多量による仮死状態で倒れていたのを、誰かの手によって、アメリカ軍艦に運ばれたのであった。また、意識が戻った際、傍らにいて白い歯を見せて軍医を呼んでくれたプエルトリコ人の水兵が、実は自分に輸血してくれたということを平櫛さんは後で知った。アメリカ軍艦はたくさんの輸血保存血を持っていたが、それらは米兵のための輸血用の予備であったため、捕虜である平櫛氏には使用することが許されなかった。そこで生血を提供する者を募り、この米兵が名乗り出たということらしい。この後ハワイに収容されてから、平櫛さんは希望かなってこの米軍に従軍していたプエルトリコ人兵士と再会を果たし、感謝の意を表している。¹⁷

7月7日の総攻撃で負傷した青木八郎さんは、真珠湾の第一海軍病院のカマボコ病棟で約半年ほど治療を受けることとなった。そこで世話になったアメリカ人の中でも特にミス・フィンシャという小柄な看護婦は、彼を「エオキ、エオキ」と呼んで親身も及ばぬ世話をしてくれたという。青木さんはこの病院に

¹⁶ 前述『日本領サイパン島の一万日』p.334。

¹⁷ 前述『肉弾！！サイパン・テニアン戦－玉砕戦から生還した参謀の証言 大東亜戦争秘録』pp.262－264。

て「膝の関節が砕けて固まってしまっているのです、曲げることは出来ない」と軍医に宣告されてしまったが、彼はショックどころか、むしろ切断もしないでよくここまでしてくれたと、感謝の気持ちでいっぱい、「サンキュー」としか英語で言えないのが残念だったそうだ。そして、ここを退院する時には、彼は何故か涙がこみあげてきたらしい。¹⁸

日本人軍人捕虜は民間人捕虜とは違い、ハワイに送られたことは先ほど触れたが、この後彼らはさらにアメリカ本土へ送られることとなる。そうした境遇の中で、軍人捕虜も反米派と親米派に二分化していく。

例えば、先ほど紹介したプエルトリコ人の米兵によって命を救われた平櫛孝さんは、ワシントンに護送された時、アメリカ大陸の広さ、デトロイト、シカゴで見た活気溢れるたたずまいに、「こんなアメリカと戦争をするなんて」と後悔に似たものを感じたともいう。¹⁹

加えて、守備隊中尉だった松尾正巳さんは、ハワイの収容所で米兵とバレーボールや野球をする中で、アメリカの偉大なる物質的豊富さと群に秀でた体力に感嘆し、民主主義国を羨ましいと思った。一方で、日本人は何と貧弱なんだとも思ったそうだ。²⁰

アメリカ本土へ渡った出来事は、今まで敵としてずっと対峙していたはずのアメリカという国の偉大さを、彼らが初めて目の当たりにした瞬間であった。日本軍は、万が一敵国の捕虜になった場合の対処策を日本兵に教育していなかったのが、彼らが米軍の捕虜になった後は、アメリカに対して何をどう感じ、アメリカ兵にどのように接するかについては、それぞれ個人の自由であったようである。そういった意味で上記のような親米的証言は、彼らがアメリカに対して抱いた率直な思いと捉えることが出来よう。

¹⁸ 前述『肉弾！！サイパン・テニアン戦－玉砕戦から生還した参謀の証言 大東亜戦争秘録』 pp.351－353。

¹⁹ 前述『肉弾！！サイパン・テニアン戦－玉砕戦から生還した参謀の証言 大東亜戦争秘録』 p.375。

²⁰ 松尾正巳『サイパン俘虜記～憂国と望郷の間で～』（石風社 2009年）、pp.65－66。

第2章 沖縄戦

I. 沖縄戦におけるアメリカへの恐怖

沖縄本島に米軍が上陸したのは、1945年4月1日の早朝であった。当時、米軍の従軍記者をしていたアーニー・パイル氏は、その時の様子を自身の記事においてこう書いている。

「皆さんは信じないだろう。我々だってそうだ。こんなはずはない。だが、本当なのだ。私が加わっている海兵隊連隊は、今朝、沖縄の海岸に上陸したが、全く何の抵抗も受けなかった。・・・こんなことは、誰一人として夢にも思っていなかった。皆、海岸では大殺戮が起こるだろうと予想していたのだ。ピクニックの雰囲気だった。」

一方、沖縄の人々から見た米軍の上陸はこのようであった。

「米輸送船団の隊列を離れて、雲霞のような小船艇群が夢ではなく、海岸を目指して、怒涛のように押し寄せている。米上陸用舟艇は、海岸に着くと、真っ黒い塊のような戦車を吐き出した。吐き出された戦車は、我が物顔に、少しの躊躇の色も見せずに、戦車砲を撃ち続けている。」²¹

米軍がやすやすと沖縄上陸を果たした背景には、前年11月に大本營の意向で在沖縄兵力の3分の1をフィリピン方面に移さざるを得なくなったことがある。しかしその結果、米軍を沖縄上陸地点で撃退する作戦から南部内陸部での持久戦（立てこもり作戦）に急遽変更したため、日米両軍は多大な戦死者を出した。こういった過酷な状況の中、戦渦に巻き込まれることとなった沖縄

²¹ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たかー50年後の証言』pp.30-32。

の人々は、アメリカに対して一体どんな思いを抱いていたのだろうか。²²

登川輝子さん（当時 31 歳）は語る。

「義父が牛に草をあげるために家に帰った時に米兵たちを目撃し、【美里にアメリカーたちが侵入して来ていて、とても道は歩けない】と急いで戻ってくると、皆は【これでこの世も終わりだ】と衝撃を受けました。一緒にいた義妹キヨとシゲは顔色を失い、悲鳴を上げ【早くヤンバルに逃げよう】と騒いでいます。その日の夕方、家族全員が大慌てで知花の山へ逃げると、すでに日も暮れており、周囲には米兵がいっぱいいて、カチャカチャと銃剣の音まで聞こえます。私たちは声も身動きも出来ずにいました。」²³

知念正喜さん（当時 15 歳）は、逃避行中の出来事を次のように語る。

「その日は、夕方になって前美殿と前松根のおばさん 2 人が【大変だ、アメリカーが美里に攻め込んできた】と言って、がたがた震えながら、逃げ込んで来ました。²⁴8 月上旬は月夜の頃で、米兵は昼夜の別なく、女性を求めてきました。当時、小屋にいた女性は私の母（44 歳）と母よりは少し年上の地元の方らしい婦人の 2 人でした。2 人は米兵に見つからぬよう、身を隠しての生活を送り、皆も片時も気の抜けない毎日でした。」

そして、その後の収容所生活については「田井等市の生活は、雨や米兵に襲われる心配もなく安心して生活出来ました。」と付け足している。²⁵

川畑良子さん（当時 16 歳）の証言はこうである。

「私たち若い女性は米兵に見つかると大変だということで昼間は民家の天井に隠れて仮眠を取ったりしていました。7 月頃だったと思いますが、炭焼き窯に私たちをはじめ多くの避難民が隠れていると、いきなり米兵の気配を感じて大騒ぎになりました。米兵は若い女を捜していると聞いていましたから、私は

²² 前述『沖縄戦 米兵は何を見たか－50 年後の証言』 pp.32－37。

²³ 沖縄市企画部平和文化振興課編『里からの戦さ世証言』（沖縄市役所、那覇出版社 1998 年）、pp.61－62。

²⁴ 前述『里からの戦さ世証言』 p.46。

²⁵ 前述『里からの戦さ世証言』 pp.53－54。

悲鳴をあげ大声で【アンマーヘクナー、ヒギレー、ヒギレー（早く逃げなさい）】と叫びました。米兵たちはスピーカーから【デテコイ、デテコイ】と叫んでいます。私はもう殺されるんだと思いましたが、仕方がないので樋川のキヨちゃん（当時 15 歳）と 2 人で白い布切れで降参旗を作り、それを上げて出て行きました。すると、今度は母がびっくりして【イクナケー、イクナケー（行くんじゃない）】と狼狽し叫びます。米兵は【ハロー、ハロー、あんた方はこっち来い、こっち来い】と大声を上げていました。私は驚きと殺されるという恐怖心から【アンマー、どうしよう！】と泣き叫びましたが、母が【もう見つかっているから、仕方がない、行きなさい】と言いましたので、米兵に捕まりました。」²⁶

サイパン戦の証言と同様、沖縄戦の証言からも米軍との遭遇は、生きた心地がしないものだったことが伺える。特に、女性は米兵から強姦されることを極度に恐れ、怯えていたことも上記の証言から、解釈することが出来る。

II. 日本人捕虜の証言

沖縄戦の後日本人捕虜は、サイパンと同様に、民間人と軍人は分けて収容された。以下ではサイパンと同様、彼らの姿勢が反米派、親米派に変化していく様子を考察する。

（1）反米派

松本秀子さん（当時 21 歳）は、逃避行中に家族 5 人全てを亡くしたことで、生きる希望も失った。しかしながら、「私たちの家族がどこでどうなったかを

²⁶ 前述『里からの戦さ世証言』 pp.72－73。

伝えるために生き残りなさい」という母の言葉を胸に、1人で米軍の捕虜となった。彼女が捕まった時、米兵はチョコレートや水、色んな物をくれたそうだ。さらに、取り調べの時でも赤いハンカチや指輪をくれたが、そんな物はもらう必要がないと言い、また、怖くて何をされるか分からないからと捨てたのだという。²⁷

宮良ルリさん(当時18歳)は、ひめゆり学徒隊で生き残った1人であった。米軍に捕まった彼女は、最初に伊良波の収容所に入れられた。そこでは、師範の学生3名がすでにおり、しかも、虱まみれの自分と比べてその3人は随分とさっぱりした服装をしていた。彼女は「あんたたちのような人がいるから日本は負けてしまうんだ。あんたたちは何ね。」と言って突っかかったものの、この日は、とりあえず伊良波で1泊した。ところが、この日の夜中、黒人兵が襲ってくる事件が起こり、伊良波収容所内は騒然となった。結局、黒人兵はMP(軍隊の警察)に捕まったということを聞いて宮良さんはほっとしたが、「あー、せつかく命があって、戦場から戻って来て、やっと青空の下で眠れると思ったのにね、またこういうのが待ち受けていたのかというような思いで一睡も出来ませんでした。とても恐ろしい1日を過ごしました。」とその時のことを話している。翌日、宮良さんは沖縄市の慶良間収容所へと移された。ここでは身に着けるものがなかったため、カーキ色のシャツやズボンなど、軍の服装をしていると、周りの民間人捕虜から「あんたがそんなものを着けていたら、私たちがアメリカに殺されるから脱ぎなさい」と言われてしまったのだそうだ。

28

収容所での軍作業に慣れるにつれて、山積みされている豊富な米軍物資から衣類や食糧を抜き取る者が現れるようになる。その窃盗品を【戦果】と呼ぶものもでてきて、周りの者はこれを歓迎し、真面目な者を馬鹿正直と嘲笑する風

²⁷ 行田稔彦『生と死・いのちの証言 沖縄戦』(新日本出版社 2008年) pp.629-630。

²⁸ 前述『生と死・いのちの証言 沖縄戦』 pp.633-635。

潮が芽生えた。それをある証言では、「敗戦の悔しさもありますし、罪の意識がない。」と説明する。²⁹ 特に南洋帰還者や復員者の中には、特攻精神が変じて「斬込隊」と称し、米軍部隊に忍び込んで大量の戦果を挙げて持ち帰る者が多くなったという。³⁰ つまり米軍の豊かな物資に感謝して親米派に転じるのでなく、収容所に入れられた後も小さな対米戦をまだ続けていた、ということであろう。

(2) 親米派

平竹さん（当時 26 歳）は、家族と共に墓に身を隠していたある日、吉島袋のお母さんが「アメリカーは何もしない。煙草もくれたよ。さあ、私の家に行こう。」と言ってきたため、4 月の末頃の昼間、皆で墓から出て吉島袋の隣の東吉良に引っ越すことにした。その平吉良でのとある出来事について、彼女は次のように語る。

「ある日のこと、アメリカー（米兵）のバンチョーという人が、ヌーメーグミ（玄米）を東吉良に持って来たので、一升瓶を捜してきて、その中にいれ、木切れでつついて精米にして食べました。また、彼は、鶏と豚も持ってきてくれましたので、一緒に住んでいた松十さんがこれをこしらえ、皆で食べたんですよ。その米兵には私たちが困った時に何度かお世話になり、今でも感謝しています。」³¹

別に捕虜になった宮良ルリさん（当時 18 歳）が宜野湾の野崇にある米軍の野戦病院に行くと、今まで軍隊と一緒にいて軍国少女として育ったはずの上原登美子さんという人が、真っ白なワンピースを着けて髪にリボンをしており、その姿を見て唾然としたという話もある。³²

²⁹ 前述『里からの戦さ世証言』 p.43。

³⁰ 前述『沖縄の反戦ばあちゃんー松田カメ口述生活史ー』 pp.137-138。

³¹ 前述『里から戦さ世証言』 pp.65-67。

³² 前述『生と死・いのちの証言 沖縄戦』 p.634。

サイパン戦同様、沖縄戦後に軍人捕虜の中にはアメリカに対して好意的な意見を持つ人々が出じてきた。彼らは米軍に協力的で、何のためらいもなく自分の部隊や位置を教えただけでなく、対日宣伝ビラの作成も手伝ったという。特に沖縄からハワイへ輸送された「ハワイ組」の人々に、そういった変化が顕著に表れたようである。

防衛隊として球 18818 部隊（第 504 特設警備工兵隊）に入隊後、新たに石部隊（第 62 師団）に配置された平宏俊さん（当時 29 歳）は、6 月 27 日頃屋武岬にて、投降を呼びかけてくる米兵から逃げる気力を失っていた日本兵たち約 150 名と共に一斉に米軍の捕虜となった。その後に関して彼は「1946 年 7 月頃、私たちは大きな輸送船でハワイの収容所に移されました。ハワイでは、アメリカ人がとても親切で、野球や沖縄の芝居を観せてもらいました。収容所では、食事のおかわりも自由でした。」と語る。³³

防衛隊として徴収され、与那原に布陣していた球部隊に入隊した平武彦さん（当時 17 歳）の体験は次のようなものである。

「6 月末頃、摩文仁の海岸に追い詰められた私たちは、米兵に発見されて捕虜となり、屋嘉の収容所へ連行されました。それから野国（現・嘉手納町）から船に乗せられ、ハワイへと送られました。私は未成年ということで仕事をさせてもらえず、二ヵ月後くらいにサンフランシスコのエンジェル島の捕虜収容所に移されました。そこでは米兵は親切でした。仕事といっても交代で外の掃除をするぐらいで、きつい労働もなく、食事は美味しいし、本当に気楽でした。」

34

球部隊から独立臼砲第一連隊（球 3666）に砲兵として入隊した登川清吉さん（20 歳）は、ハワイでの捕虜生活について、「ハワイは食糧も豊富で米兵たちは親切でした。待遇は良かったです。日常の食事は無料だったので、お金は

³³ 前述『里からの戦さ世証言』 pp.142-145。

³⁴ 前述『里からの戦さ世証言』 pp.145-146。

必要ありませんでした。」と語る。³⁵ また球部隊 49 中隊の江洲眞榮さん（当時 32 歳）も「ハワイでは食糧が豊富で毎日ご馳走でした。米兵たちも親切で何の不安もありませんでした。」と語っている。³⁶

鉄血勤皇隊員だった渡久山朝章さん（当時 17 歳）は、ハワイの捕虜収容所で米兵が持っていたオレンジ色の表紙の「**Japanese Phrase Book**」という小冊子を見せてもらう機会があった。中を見てみると、左端に英語が書いてあり、次に日本語発音綴りが書かれており、それはヘボン式ローマ字と漢字混じりの日本語であった。**Help**（助けて）から始まり、**Hungry**（腹がすいて）、**Thirsty**（喉が渴いて）、**Wounded**（傷付いて）等々と、いずれも生命・生存に関わる大事な事柄が書かれており、彼はそのことを米軍が日本人の生命を尊重する精神をもっているからだ、と見て取った。さらに、そうした配慮を **Are you…?** と問いかける会話例からみて、米軍がいかに敵兵や戦場地域住民に対して人情深いかを感じた。かつて、砲煙弾雨下で、その砲爆撃があまりに熾烈過ぎることから、米軍は無差別・勝手気ままで冷酷非情、まさに鬼畜だと思い込んでいたのだが、この小冊子を見るに及んでは、今までの考えを改めざるを得なかった、と彼は語る。³⁷ ハワイの収容所で見た米兵の様子からしても、どうしても鬼畜米兵、洋鬼（ヤンキー）の様相はない。髪や目の色、肌の色は異なっているが同じ人間だし、彼らはむしろ日本兵より寛大なところさえあった、と感じたそうだ。³⁸

このように反米派と親米派に別れた日本人に対して、米軍や米兵は、一体どのように考えたのだろうか。次の章では、こうしたサイパン戦と沖縄戦において、米軍側の日本人に対する意識・行動がいかなるものだったについて

³⁵ 前述『里からの戦さ世証言』 pp.153-155。

³⁶ 前述『里からの戦さ世証言』 pp.155-156。

³⁷ 渡久山朝章『アロハ、沖縄人 PW-17 歳のハワイ捕虜行-』（ひるぎ社 1994 年）、pp.56-58。

³⁸ 前述『アロハ、沖縄人 PW-17 歳のハワイ捕虜行-』 pp.53-54。

考えていくことにする。

第3章 アメリカ側の動向とその思惑

I. サイパン戦の場合

第1章で挙げたサイパン戦を経て親米派になった日本人捕虜のエピソードから推測すると、米兵は日本本土決戦を目指して、日本に対する交戦意識をどんどん高揚させていったはずなのに、敵国の日本人捕虜に対してとても好意的に振舞ったように見える。だが、実際のところ、彼らがどのようなことを考えて日本人捕虜に接していたのかは分からない。というのも、こうした行動に違和感を抱く幾つかの理由があるからだ。

サイパン戦に向かったアメリカ兵の手記、また米軍の戦略と政策に関する資料は今回の卒論では扱えなかったが、調べた資料の中に英単語「docile」という形容詞があった。この言葉は、日本に対する作戦に従事したアメリカ軍の、陸海空海兵各隊の将官から一兵に至るまで徹底して教えた概念らしい。それは「日本人の特徴的性格」を表現する語であり、その意味は「柔順な、素直な、御しやすい、扱いやすい」ということである。つまり、米軍が敵である日本人の性格として兵士たちに教えたのは、いったん降伏させてしまえば小動物のように「御しやすく扱いやすい」ということであつた。³⁹

確かに、当時の米軍には人種差別的な態度があつたのは疑うまでもない。前述の平櫛孝参謀に対する献血のエピソードでは、茶色い肌のプエルトリコ人の兵士の血を彼に輸血させたという。これは、白人の血は、白人兵のためにとって保存しておき、有色人種には使えない、ということであろう。また、ススペ・

³⁹ 前述『肉弾！！サイパン・テニアン戦－玉砕戦から生還した参謀の証言 大東亜戦争秘録』p.356。

キャンプに收容されていた斎藤貞三さんの話す【クロ】の事件にしても、收容所内の民心安定を図る狙いがあったというだけでなく、米軍が意図的に黒人兵を最前線に投入していたことが伺えて、米軍が、黒人に対して人種差別を行っていたことが感じられるのである。⁴⁰

要するに、こうした事実を含めると、親米派日本人捕虜の証言に出てくる米兵の言動は、純粹に良心から出たものなのか、ただ国際法に基づく当然の義務としてのものだったのか、それとも、日本人が「扱いやすい」性格と見くびったからのものなのか、明確でない。もし日本人が（反米的感情を持つものも、それを隠して）「docile」に振舞わなかったら、米兵たちは果たして日本人捕虜に対して好意的に接していたのだろうか。また何故米軍は、日本人をそのような「小動物」のように見なしたのだろうか。当時の日本人捕虜が語ったように、米兵たちの言動が日本人を対等の友人のように扱った上での「親切」や「公平」に基づくものだったのかどうかは、疑問が残る。

II. 沖縄戦の場合

沖縄戦における米軍側の動向とその思惑について考えるにあたり、『沖縄戦 米兵は何を見たかー50年後の証言』という本に出てくる米兵の証言を参考にした。この本は、沖縄戦当時 4 歳に満たない子供だった著者の吉田健正さんが、沖縄戦を経験したことのある元米兵らに対し、戦後 50 年経った時点で、当時の状況をインタビューした内容を中心に書かれたものである。50 年の月日が経てば、記憶は薄れ美化されていくものであるし、また、人は記憶に残っていても、ありのまま全てを話すとも限らない。しかしながら、今回は元米兵らが実際に自ら語った米軍側の貴重な資料として紹介をすることにする。

沖縄戦は、米軍にとって日本本土上陸作戦の最後の飛び石であった。そして、

⁴⁰ 前述『日本領サイパン島の一万日』 p.334。

沖縄戦は同時に沖縄住民を日本から「解放」するための戦いでもあったのだった。少なくとも多くの米兵がそういった考えを持っていた。⁴¹

「わざわざ民間人を殺す兵隊はいなかった。民間人には危害を加えないようにと命じられていた。レイテからの船上で、【デテコイ】や【テヲアゲロ】という言葉を知った。民間人はMP（憲兵）に引き渡し、憲兵はさらに後方の軍政担当者に引き渡すことになっていた。」（元第96歩兵師団分隊長 ドン・デンカー氏）⁴²

「日本軍は沖縄住民にひどい扱いをしてきた。そのため、私たちは住民に同情していた。日本軍は、軍人だけでなく住民に対しても、もし捕虜になれば、アメリカ人は道路に並べて、ブルドーザーか戦車の下敷きにしてしまう、などと脅かしていた。しかし、アメリカ人が虐待するどころか、手厚く扱うということを知って、住民はとても喜んでいて。また、沖縄では、少なくとも私の知る限り、また配属された第96歩兵師団に関する限り、捕虜虐待や住民虐殺はなかった。」（元第96歩兵師団 ドナルド・キーン）⁴³

米軍がサイパンと沖縄の「解放」のために、日本人捕虜に対して行なうことになっていた心理作戦では、以下のようなビラを用意した。

『沖縄の人民へ！！』

我等の教訓に従って行けば米軍から親切な待遇を受けます。皆さんは只今の心配・飢餓病気又は苦痛から直ちに逃れることが出来、食糧・飲水・家屋を与へられ医者の手当を受けることが出来ます。』

『生命を助けるビラ』

1. このビラに書いてある方法通りにする人は必ずアメリカ軍が助けます。

⁴¹ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たか－50年後の証言』 p.8。

⁴² 前述『沖縄戦 米兵は何を見たか－50年後の証言』 pp.131－134。

⁴³ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たか－50年後の証言』 pp.177－178。

2. そして国際法によって良い取り扱い、食物、着物、煙草、手当等を与へます。』

『住民に告ぐ

今米軍は此の島を攻めてみますから皆さんの命が危ないです。……若し自分の命が大切ならば皆さんは指図に従がひなさい。』⁴⁴

さらに米軍は、国際的な条約（ハーグ陸戦法）を尊重して、戦闘中であれ、むやみに墓や文化財等を破壊してはならないとの指令を発していた。⁴⁵これらの話をまとめると、沖縄戦に参加した米軍や米兵は日本人捕虜に対して、国際法に基づいた人道的な扱いをしており、日本兵を殺したり、住民を虐待するという事はなかったのだと解釈することが出来るの。

だが果たして本当にそうなのだろうか。結論から言えば、答えは NO である。こう言える根拠は4つある。

まず1つ目が、上記にあげた対日本人捕虜作戦とは明らかに矛盾した元米兵らの以下のような証言にある。

「まず撃って、質問はそれからが戦場のルール。われわれが日本兵にあふれるばかりの慈悲を施したという覚えはない。また、少なくとも、沖縄戦が始まってからしばらくは捕虜を取らない（注：捕虜として確保するより殺してしまうという意味）というのが多くの指揮官や兵士の方針だった。それは、醜い敵であり、足手まといになるからだ。」（元第6海兵師団第22連隊衛生兵 フランク・マック氏）⁴⁶

「ある日の午前3時頃、武器小隊と蛸壺に潜んでいると、15メートルほど離れたところで物音がした。一斉射撃をした後に調べてみると（デンカー氏自

⁴⁴ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たかー50年後の証言』 p.93。

⁴⁵ 宮城悦次郎『沖縄占領の27年間ーアメリカ軍政と文化の変容ー』（岩波書店1992年）、p.9。

⁴⁶ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たかー50年後の証言』 pp.166-167。

身は、ピストルしか携帯していなかったもので、発射しなかったらしい)、転がっていたのは民間人だった。中に、赤ん坊を背負った女性がいた。背負われていた恐らく 1 歳にも満たない赤ん坊は、しばらく激しく泣き続けて、兵士たちを悩ませたため、1 人の兵士が機関銃をぶっぱなし、赤ん坊の泣き声は止んだ。民間人に対する態度について言えば、命令を無視して、彼らを射殺することをなんとも思わない奴もいた。敵だから構わないと考えていたのだ。私自身は、真っ暗闇で起こったあの事件を除いて、実際に目撃したことはないが……。確かに危害を加えられた民間人は多かったと思う。」(元第 96 歩兵師団分隊長 ドン・デンカー氏) 47

デンカー氏の知る限り、米兵が意図的に民間人を殺したのはこのときだけだという。しかし、まだこの事件以外にも似たような事件が実際には幾つも起こっていた。

「1945 年 4 月 4 日が暮れて 1 時間ほど経った頃、露營するための塹壕を掘っていたら、遠くで手榴弾が爆発するのを聞いた。仲間と手を止め、音がしたほうへ目をやった。4 つの黒い影が近づいてくる。日本語で【トマレ！】と叫んだ。ところが、黒い影はさらに足を速めてこちらに向かう。すっかり怖じ気づいて、手にしていた小型機関銃や自動小銃を影に向かって発射した。4 つの影はその場に倒れた。手探りで服装を確かめてみて、全て民間人だということが分かったが、後の祭りだった。その時、鋭い泣き声が闇を貫いた。即死した女性がおんぶしていた赤ん坊だった。海兵隊員たちは、泣き叫ぶ赤ん坊も射殺した。戦場ではそれ以外の選択肢はなかった。」(元第 1 回海兵師団第 7 連帯第 1 大隊 ジョージ・リンス氏) 48

47 前述『沖縄戦 米兵は何を見たか－50 年後の証言』 pp.134－135。

48 前述『沖縄戦 米兵は何を見たか－50 年後の証言』 p.139。

自分自身も恐怖にとらわれてあらゆる物音や動きに神経過敏になっていた若い米兵たちは、闇の中で日本兵と住民の区別が付かないまま、銃弾を放つことが多かったのである。

また、リンス氏の所属する C 中隊には、マーシュという海兵隊員がいた。リンス氏はそのマーシュという男についても証言を重ねている。

「ある日、沖縄北部で、中隊は日本兵が何人かの女性と子供を殴っているのを見て、その男を撃った。男はその場に倒れた。後で負傷して仰向けになっている日本兵を見つけたマーシュは、小型機関銃で、まず男の手の指、次は足の指、そして最後に頭を吹き飛ばした。また、マーシュが彼から娘を守ろうとした老人をナイフで刺し殺したという話を同僚から聞いたこともある。一緒に日本兵を捕虜にした時には、捕虜を大隊司令部に連れて行ったところ、上官は捕虜を預かることを拒否し、【お前が面倒を見ろ】とリンス氏に言った。食糧や水もないのにと悩んでいたところ、マーシュが【問題】を解決してくれた。捕虜に穴を掘らせ、小型機関銃で頭をぶち抜いてしまったのである。」(元第 1 回海兵師団第 7 連帯第 1 大隊 ジョージ・リンス氏) ⁴⁹

こうした元米兵の証言に加えて、その対日本人捕虜作戦（心理作戦）の目的自体にも疑念を抱く。実は、この作戦準備は、すでに 1944 年 12 月、ハワイのパールハーバーにある米海軍太平洋艦隊司令部の心理作戦部で始まっていた。その心理作戦の目的は非常に明快だった。つまり、沖縄人を捕虜として捕らえた後に、米軍にとって管理しやすい存在にすること、そして日本兵の場合は、心理的に追い込み彼らの士気が弱まったところを米軍が捕らえることで、米兵の犠牲を最小限に抑えること、の 2 点である。 ⁵⁰

さらに米軍は、効率的な住民管理に必要と思われる情報、沖縄の歴史・政治・

⁴⁹ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たか－50 年後の証言』 p.142。

⁵⁰ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たか－50 年後の証言』 p.95。

経済・文化・人種的特徴・自然など、あらゆる面における情報を収集し、「民事ハンドブック」や「軍政要覧（テクニカル・ブレイク）」といったものを作成していた。⁵¹ この中において米軍は、沖縄の人々を日本人とは考えていなかった。これは、かつて沖縄が独立した王国であったこと、中国と日本の両方に対して朝貢貿易を行っていたこと、そして廃藩置県後も日本人によって差別され偏見をもたれていた、などの歴史的認識に根ざしたものだった。⁵² また、1945年7月20日発行の米軍資料には、沖縄住民にとって外国支配が真新しいものではないとある。⁵³ つまり、これは米軍が沖縄を支配したとしても沖縄の住民にとってはそれは屈辱でも恥でもなく、彼らの歴史上よくあった出来事の繰り返しに過ぎない、という程度にしか感じないだろう、という沖縄の住民を見くびった予測である。

これらの事実を見る限り、米軍が用意周到に行なった心理作戦とは、純粹に「罪のない民間人を助けたい」、「無駄な死を少しでも減らしたい」といった人道的思いからのものではない。ましてや、先に挙げた沖縄住民を日本から「解放」してやるためでもないことは明白である。

さらにこの心理作戦が、日本人と沖縄人の「心理的亀裂」を突くことに重点が置かれていたことは特に注目に値する。⁵⁴ 「外国支配が真新しくない沖縄人は、今まで日本に虐げられてきた。もしも、ここで我々が沖縄人を厚遇すれば、彼らは我々に従順になり、（沖縄を占領・支配していく上で）扱いやすくなるかもしれない」という米軍の狙いがあるのは明らかだ。

つまり、親米派の日本人捕虜が語るような好意的な米兵の態度の裏には、実は戦後アメリカの対日戦略の計算が存在していたのだ。「米軍が沖縄での占領を容易くするため」に、占領下における住民管理を「計算して行なう」という心理作戦が、結果的に日本人捕虜にとっては、好意的に見えただけ、という可

⁵¹ 前述『沖縄占領の27年間－アメリカ軍政と文化の変容－』pp.9－10。

⁵² 前述『沖縄占領の27年間－アメリカ軍政と文化の変容－』p.51。

⁵³ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たか－50年後の証言』p.110。

⁵⁴ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たか－50年後の証言』p.83。

能性があるのだ。

米兵の突然ともいえる日本人捕虜に対する友好的態度の真意を疑う 3 つ目の根拠としてあげるのが、米軍の戦い方である。沖縄戦において米軍は、携帯用火炎放射器だけでなく、ハワイで完成した火炎放射器装甲車も、第 2 次世界大戦において初めて使用した。こうした火炎放射器の威力は巨大なもので、日本兵ばかりでなく、一般住民が壕内で焼死または窒息死した。⁵⁵ また、「米軍は国際的な条約（ハーグ陸戦法）を尊重して、戦闘中であれ、むやみに墓や文化財等を破壊してはならないとの指令を発していた」と先ほど述べたが、実際のところ、沖縄特有の亀甲墓は、避難壕として日本軍や住民が使用していたために、徹底的に攻撃された。その当時すでに国宝に指定されていた首里城も、その地下に日本守備軍の第 32 軍の司令部壕があったために、完全に破壊された。⁵⁶

さらに、次のような米兵による証言もある。

「洞穴では、命令に反して、よく戦利品漁りをやった。洞穴という洞穴に入って、日本兵の制服や銃剣、下着、靴下・・・その他なんでも拾ってくる兵士もいた。死体から金歯を抜き取ったという話は聞いたが、目撃したことはない。死体には慣れっこになっていて、ハエがたかっている日本兵の死体の上に座って食事を取ったこともあった。」（元第 6 回海兵師団所属兵長 エドワード・フォックス氏）⁵⁷

死体から何かを奪うという戦利品漁りも十分恐ろしいことではあるが、それとは比べ物にならないほど、極めて恐ろしいエピソードがある。それが「トロフィー・スカル（勝利の頭蓋骨）」の存在である。第 2 次世界大戦末期頃の 1944

⁵⁵ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たか－50 年後の証言』 pp.156－157.

⁵⁶ 前述『沖縄占領の 27 年間－アメリカ軍政と文化の変容－』 p.9.

⁵⁷ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たか－50 年後の証言』 p.163.

年5月22日付のアメリカの雑誌『ライフ』誌には、金髪の女性がテーブルに置いた頭蓋骨を眺めている写真が掲載された。これは太平洋で日本軍と戦っている恋人の米兵からプレゼントとして贈られた日本人兵の頭蓋骨だ。

当時米兵の中には、戦死した日本兵の鼻や耳たぶ、頭蓋骨などを戦争の記念品として奪っていくことが流行していた。戦車に日本兵の首をぶら下げたり、日本兵の歯を集めてネックレスを作ったといった話は当時の米国の新聞などで報道されているし、米兵が切断した日本兵の首を大鍋で煮て、肉や脂肪をそぎ落として「頭蓋骨トロフィー」を作っている写真も残っている。こうした残忍な行為に対して、戦争当時の米軍は厳格に対処し違法行為として懲戒処分の対象にするとの指令を出していた。だが戦後マリアナ諸島から日本に送還された日本兵の遺体の約60%に頭部がなかったことなどを踏まえると、指令は一部でしか実行を伴っておらず、トロフィースカルは、かなり広範囲にて行なわれていたという推測がアメリカ人研究者からも近年あがっている。⁵⁸

米軍は表向きは日本人捕虜を国際法に基づいて保護し、危害を加えない姿勢をとっていたが、実際のところは十分承知の上で民間人をも殺すことも度々あったし、日本兵の死体を冒瀆する行為も行なっていたということが分かった。

第4章 真実の声を探して

I.サイパン戦における日本人捕虜のアメリカ人観の真相

⁵⁸ <http://news.nifty.com/cs/magazine/detail/sapio-20101011-01/1.htm>

(武末幸繁『スクープ!各地で頭蓋骨トロフィーが続々と発見 アメリカを彷徨「旧日本兵の遺骨」(SAPIO 2010年9月29日号掲載記事のネット配信)(2011年1月8日閲覧。) 米兵が「コレクション」した遺骨は、戦争犠牲者の保護を定めたジュネーブ条約違反の可能性もあるとして、カリフォルニア州のグロリア・ロメロ上院議員は日本への謝罪とこの遺骨の返還を求めたそうだ。

サイパン戦後に、日本人民間人捕虜や軍人捕虜に接した米兵は、腹の内は分からずとも彼らに意外に好意的な部分があった。だが、幾ら彼らが好意的だったからといって、「親米派」になった日本人収容者はなぜ彼らに好感を抱いたのか。

その原因は、何よりも米軍が彼ら日本人捕虜の「生きる」手助けをしたからではないだろうか。サイパンのススッペ収容所では、それまでの逃走生活による疲労と栄養失調で多くの収容者が死亡した。⁵⁹ そのため、厳しい逃亡生活をしてきた日本人捕虜にとって収容所ではまず「生きる」ことが何よりも先決だったのである。そうした中で米軍側は、野菜不足を解消するため収容所内の農場作りを許可し、ハワイから野菜の種子を空輸するなどの協力をしてきていた。⁶⁰ すなわち敵である米軍のしたことは、結局日本人捕虜を「生かす」ことに繋がったのだ。

軍人の場合も同じことが言える。そのまま戦場に放置されていれば、死んでいたはずの日本兵を救出し治療をしてくれたのは、紛れもなく米軍だ。もちろんアメリカが敵であったことには違いないが、日本人捕虜が戦場から逃れた後、「生きのびる」過程において米軍の存在は非常に大きかったのである。

このような理解だけならば、サイパン戦における日本人捕虜の中に親米派の人々が生まれたことは不思議はないだろう。だが、実はそうとも言い切れないのだ。「生きる」ということに余裕が出て来ると、民間人収容者の間では母国・日本に対する思いが強まって、戦闘終了後もサイパンのジャングルにこもって抵抗を続ける日本残存兵に秘密の援助を行ったりするものが出てきた。⁶¹ さらに第 1 章で取り上げたように、日本の戦勝を予想する議論も高まっていた。つまり、サイパン戦の日本人捕虜は米軍の行為によって生き延びることになりそのことに感謝することはあっても、米軍の戦争目的を全面支持

⁵⁹ 前述『烈日サイパン島』 p.272。

⁶⁰ 前述『烈日サイパン島』 p.273。

⁶¹ 前述『烈日サイパン島』 pp.278-279。

するようになったり、アメリカという国の理念を全面肯定するようになる、というレベルまで達するつもりはなかったようだ。

II. 沖縄戦における日本人捕虜のアメリカ人観の真相

サイパンへの移民者の多くが沖縄出身者だったということは最初にも述べたが、彼ら移民した理由にはサイパンを含む南洋群島は収入がよく、さらには沖縄の経済が疲弊した状態にあり、出稼ぎにいかなければ生活できなかったためだった。だが沖縄の人々が移民した大きな理由の1つには、墓の費用を捻出するためというのもあったのだという。一見奇妙な理由に聞こえるが、実は先祖を敬い大切にす沖縄では、墓は大きくてしばしば家を建てる以上の費用を要したのであった。⁶²

墓の費用を捻出するために出稼ぎに行くほど先祖を敬うような、家族という絆を大切にす沖縄の人々が、何故家族や仲間の命を奪った米軍の捕虜になると一変して親米派になってしまったのだろうか。考えられる理由は、大きく3つあるのではないかと思う。

まず、1つ目は、「精神的ショックからの逃避」である。

呉屋善考さん（当時14歳）は語る。「捕虜になる前に、南部で3ヶ月間も飲まず食わずしているでしょ。歩くのもやっとなのに収容所に行ったら、土の上に寝かされるでしょ。南部の方が戦争体験を語ろうとしないのはそれなんですよ。山原は、1、2週間の戦争ですね。南部の人は、今でも底力がないと、戦争のことを家族にも、なかなかしないですよ。」⁶³

そして、この論文で度々登場する宮良ルリさんは、1945年6月19日隠れていた壕に米軍が投げ入れてきたガス弾攻撃のために3日間意識を失った。⁶⁴

⁶² 前述『沖縄の反戦ばあちゃんー松田カメ口述生活史ー』p.v。

⁶³ 前述『生と死・いのちの証言 沖縄戦』p.627。

⁶⁴ 宮良ルリ『わたしのひめゆり戦記』（ニライ社 1986年）、p.9。

その攻撃で一緒に隠れていた職員・生徒 47 名中 42 名が犠牲になったが、彼女は意識を取り戻した際仲間のほとんどが断末魔の状態で見ても「皆、死んでしまったのか」というくらいにしか感じる事が出来ず、悲しくもなく涙も出なかったそうだ。「神経はすっかり麻痺してしまい、生きた人間の感情はもうありません。もぬけのからになってしまい、ぼーっとして、考えることも出来なくなっていました。私は魂の抜けた腑抜け人間になっていました。私は隠れる意欲も失って、ただ座ってばかりいました。」と彼女は言う。⁶⁵

宮良ルリさんと同じく、ひめゆり学徒隊だった宮城喜久子さん（当時 16 歳）は、1946 年 4 月に、収容所から具志川の沖縄文教学校に入ったところ、偶然、荒崎海岸で一緒に収容された与那嶺松助先生が担任となった。そして、先生は彼女に「あの（ひめゆり学徒隊の）13 名の遺骨はそのままになっているんだ。それを拾いに行こう」と言うが、宮城さんは「先生、辛いです。私はもう 2 度と荒崎海岸には行きません」と断った。だが、結局先生に何度も説得されて、彼女は遺骨収集に行くことになる。しかし遺骨収集の際、宮城さんは声を上げて泣き、「先生、もう嫌です。帰りたいです」と先生に訴えたのだった。遺骨収集に行った当時のことを振り返り、彼女はこうも話している。「（死んでいった仲間の）あの姿を見て、本当に来ない方が良かったと、つくづく思いました。だから、その 4 名の遺骨をどういう風に運んだか、覚えていないんです。頭が真っ白になっていましたね。その後、もう 1 回行ったのかもしれませんが。遺骨を収集していますから。初めての時は、遺骨を持ち帰ったという記憶がありません」⁶⁶

こうした証言からは、やはり米軍の攻撃に直面した精神的ショックとその現実を受け入れられずにいる、もしくは思い出したくないという悲痛な想いが伺える。察するに、目を覆いたくなるようなあまりに悲惨な経験をした後捕虜に

⁶⁵ 宮良ルリ『わたしのひめゆり戦記』 pp.150-151。

⁶⁶ 前述『生と死・いのちの証言 沖縄戦』 pp.648-650。

なった場合「アメリカが憎い」という思いをいったん抱けば、嫌でも家族や仲間を失ったというつらい経験をも思い出してしまう。そこで、「アメリカさんは、優しい」と思い込むことで、とりあえずは心の安定を保とうとしたのではないだろうか。つまり家族友人知人を殺された後、突然「敵」に対して親愛の情を抱くというのは、合理的判断ではなく、ある意味精神的異変をきたしたからだったと言えるかもしれない。

こうした精神的異常は、米軍側にも言えることだったように思える。決死の覚悟で戦闘に挑んでいた日本軍とは対称的に、米軍は常に戦闘に明け暮れていたわけではなかったようだ。沖縄戦では全く休暇がなかったという兵士の中にはいるが、一時後方に退いて「カサブランカ」などの映画を観たり、トランプ遊びやスポーツに興じた人も多かったという。また、日曜日には従軍牧師による礼拝が行なわれていた。⁶⁷ 兵隊用の雑誌にはハリウッドやメジャーリーグの記事などと共に女性のピンアップ写真やたわいないロマンス読物も掲載され、兵隊はそれらの写真を兵舎の壁に飾っていたし、彼らは本国のスポーツニュースを聞いて楽しむことも出来た。

こうした事実に対し、先に引用した『沖縄戦 米兵は何を見たかー50年後の証言』の著者である吉田健正さんは、「多くの米兵が激戦の中で若干の【平常心】や【人間性】を失わないで住民に接したのは、このような精神的ゆとり

に作用したものではない」と語っている。⁶⁸

しかし私はむしろ逆だと思う。つまり、それならば余計にこうした米兵らが戦場で犯した残虐行為は多重人格者のようで異常ではないかということだ。人間らしい娯楽を楽しむ気持ちがあって、トランプやスポーツに興じながら、しばらくすると大量の人殺しや残忍な行為に走る。また一方では、戦場では小さな子供や赤ん坊を抱いた女性を見かけると地面に武器を置いて助けに行く。

⁶⁷ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たかー50年後の証言』 p.158。

⁶⁸ 前述『沖縄戦 米兵は何を見たかー50年後の証言』 p.131。

69 しかし同時に場合によっては、何の迷いもなく彼らを撃ち殺すことも可能だったし、いったん捕らえてしまえば彼らにキャンディやチョコレートを分け与えて人間らしく扱う。こうした矛盾する行為を同じ 1 人の人間がしかもごく短時間の間でそう簡単に切り替えて行なうには、軍事教育による洗脳がなければ不可能だと考える。そしてそれは、米兵を人道的な存在にするような教育ではなかったはずだ。

事実、沖縄戦を戦った米兵の中には「突然、何も食べなくなり、シャワーに入らず、髭も剃らず、ズボンを大小便で汚す」者や、または「周囲のことが分からなくなった放心状態」に陥るような者が出たらしく、戦闘神経症患者が数千人いたという。⁷⁰ そうした戦闘神経症患者は多くの場合、奇妙な行動をとるというより、あたかも機械が故障してしまうように心身の過度の消耗によって肉体的にも精神的にも機能が止まった状態になった。⁷¹ ゆえに米兵らが、日本人に対してまるで多重人格者のようなことを当たり前に出たのは、沖縄戦があまりに激しい戦闘であったがために、日本人捕虜だけでなく日本人捕虜に接した米兵も同様に精神的に異常な状態にあったからだと推測することが出来るのである。

沖縄の人々の突然の「親米化」の背景にある要因の 2 つ目には、やはり彼らが日本本島の人々に蔑まれてきた背景があるだろう。⁷² 沖縄地上戦の間に、彼ら沖縄の住民が逃避行中に友軍、つまり日本軍に襲われたという話も決して珍しくはない。自前の壕を持っていなかった日本兵たちは、住民の避難していた壕を奪って立てこもったという。例えば、一家を惨殺された前田ハルさんは次のように語る。

「昭和 20 年 5 月下旬のある夜、午前 3 時頃でしょうか。日本刀を握った日

69 前述『沖縄戦 米兵は何を見たかー50年後の証言』p.202。

70 前述『沖縄戦 米兵は何を見たかー50年後の証言』p.37。

71 前述『沖縄戦 米兵は何を見たかー50年後の証言』p.218。

72 前述『沖縄占領の 27 年間ーアメリカ軍政と文化の変容ー』pp.5-6。

本兵が押しかけてきて、入り口で【出ろ、お前たちはすぐに出て行け！】と怒鳴りました。その時、入り口近くで寝ていた母は、怒鳴り声がよく理解出来なかったらしく、【何でしょうか・・・】と身を乗り出したところを、問答無用とばかりに、日本刀で首をはねられてしまったのです・・・母の首は、穴の奥にいた金城さんの胸にぶつかり落ちたとか。夜中胸騒ぎがして目が覚め、水汲みに行くからと言って隣の壕から穴に戻った私が【事件】を知ったのは、かれこれ1時間ほど経ってからでした。穴の近くには、眼を光らせた日本兵が、いっぱい屯しています。私は恐怖心にかられて逃げました。その途中で全身を滅多切りにされて呻いている妹と弟を発見しました。最後の3時間の苦悶の中で、途切れ途切れに2人が話してくれたところによると、母が首をはねられてから、すぐ妹は末の弟を背負い、もう一人の弟の手を取って、私のいる壕へ逃げようとしたそうです。しかし、刀を振りかざした3人の兵隊が、妹たちに追いつき、立ちすくんでいる妹と、手を引かれていた弟との腹を、日本刀の刃先で何度もこじりあげ、背負われた弟も横腹をえぐられたというんです。あまりにも惨いその殺し方、正気の間人が、同じ国の人間に、それもいたいけな子供たちを全身数十箇所に取りつけて惨殺するなんて・・・人間じゃない、あの人たちは・・・」⁷³

民間人を守ってくれるはずの味方である日本兵たちは、ただでさえ負け戦を強いられ、自分の身を守るのが精一杯で、住民に構っていられなかったのである。こうした中で、米軍の捕虜になってみると、米軍は建前上は国際法に基づいて彼らを扱い少なからず食事も与えてくれた。ここで、仲間であるはずなのに守ってもくれずむしろ襲ってきた味方の日本軍と敵であるのにも関わらず、収容所で食糧を与えてくれる米軍を天秤にかけた際、沖縄の人々は、消去法でどちらかと言えば、米軍に好意を抱いたのかもしれないのであ

⁷³ 森山康平『図説 沖縄の戦い』（河合出書房新社 2003年）、pp.105－106。

る。

そして最後の理由には、サイパン戦のところでも取り上げた、結果的に米軍が日本人捕虜の「生きる」手助けをしたからだということを挙げたい。だが沖縄がサイパンと違うのは、沖縄の場合「生きる」または「生き延びる」ことに精一杯で、サイパンのような「生きる」ことに余裕が出てくる状態まで到達しなかったということである。

事実、沖縄の収容所の生活は、サイパンの収容所よりはるかに劣ったという。食べ物にこと欠く毎日に、ソテツまで食べたそうだ。サイパン戦を経験し、沖縄に引き揚げ後も収容所生活を送った松田カメさんは「サイパンの方がよかったじゃないんですか？こっちにきたらもう大変だったもの。なんにもないの。食べ物なくて西瓜盗りに行ったもん。」と話す。⁷⁴ そのため戦況を気にするところまで行かなかったために、「米軍や米兵は優しい」と錯覚してしまったのではないだろうか。

また、このように沖縄の日本人捕虜が生きることに精一杯だったとすれば、沖縄戦の経験者の手記には、日本の戦況を気にする声が全くと言っていいほど、見られないことにも説明がつくのである。

終わりに

サイパン戦、沖縄戦の日本人捕虜には、反米派の中にも親米派が少なからず存在していたのは事実だった。だが、彼ら親米派の人々はただ単純に米兵を好意的に見ていたわけではなく、米兵に対してそう思うのには複雑な理由が可能性として幾つもあることが分かった。そのため、良好で順調な収容所生活が、戦後の良好な日米関係の基盤を作った、と考えるのは大きな誤りといえ

⁷⁴ 前述『沖縄の反戦ばあちゃん－松田カメ口述生活史－』p.136。

るのである。もちろん、サイパン戦や沖縄戦経験者の人々の手記を否定しているわけではない。悲惨な経験を言葉として残してくれたそうした手記は、私たちにとって貴重な資料であることに間違いはない。しかしながら、そうした手記を表面的に読み、「収容所での米兵と日本人捕虜の関係は良好だった」などと捉えてしまえば、当時の日本人捕虜たちが、アメリカ人に対して本当は何を感じていたのか、その真意には絶対に辿り着けないだろう。その誤解が解決しない限り、太平洋戦争と戦後日米関係の真実は判らない部分が多く残されているといわざるを得ないのだ。

使用文献一覧

(1) 書物

沖縄市役所『里からの戦さ世証言』沖縄市企画部平和文化振興課編 那覇出版社、1998年。

行田稔彦『生と死・いのちの証言 沖縄戦』新日本出版社、2008年。

下田四郎『サイパンの戦車戦 戦車第九連隊の玉砕』光人社、2002年。

白井文吾『烈日サイパン島』東京新聞出版局 1979年。

杉山蔵男『サイパン帰還者の手記』2000年。

渡久山朝章『アロハ、沖縄人 PW-17歳のハワイ捕虜行ー』ひるぎ社、1994年。

野村進『日本領サイパン島の一萬日』岩波書店、2005年。

平櫛孝『肉弾！！サイパン・テニアン戦ー玉砕戦から生還した参謀の証言 大東亜戦争秘録』図書出版共栄書房、1979年

松田カメ [述]、平松幸三編『沖縄の反戦ばあちゃんー松田カメ口述生活史ー』刀水書房、2001年。

松尾正巳『サイパン俘虜記～憂国と望郷の間で～』石風社、2009年。

宮城悦次郎『沖縄占領の 27 年間ーアメリカ軍政と文化の変容ー』岩波書店、1992年。

宮良ルリ『わたしのひめゆり戦記』ニライ社、1986年。

森山康平『図説 沖縄の戦い』河合出書房新社、2003年。

吉田健正『沖縄戦 米兵は何を見たかー50年後の証言』彩流社、1996年。

『沖縄県史 資料編18 キャンプススッペ（和訳編）現代3 サイパンにおける軍政府の作戦の写真記録』沖縄県教育委員会、2004年。

（2）インターネット・サイト

<http://news.nifty.com/cs/magazine/detail/sapio-20101011-01/1.htm>

@nifty ニュース『スクープ！各地で頭蓋骨トロフィーが続々と発見：アメリカを彷徨う「旧日本兵の遺骨」』（文＝武末幸繁）SAPIO 2010年9月29日掲載

2010年10月11日配信